

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 20 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2008 ～ 2011

課題番号：20320059

研究課題名（和文）アフリカ諸語における統語構造と声調

研究課題名（英文）Syntax and Tone in African languages

研究代表者

梶 茂樹 (Kaji Shigeki)

京都大学・大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・教授

研究者番号：10134751

研究成果の概要（和文）：

アフリカには多くの声調言語が話されている。アフリカの声調言語の特徴は、アジアの声調言語に比して、声調の語彙的機能が低く文法的機能が高いということである。例えば、多くのバンツー系諸語では、しばしば声調のみで時制・アスペクトが区別されるし、また声調のみによって関係節かそうでないかが区別される。またガーナのアカン語では所有表現が声調のみで表現されるということもある。このような声調の文法的機能はアフリカの声調言語の大きな特徴である。

研究成果の概要（英文）：

In Africa a number of tone languages are spoken. The characteristics of African tone languages are that lexical function is low but grammatical function is high in comparison to Asian tone languages. Thus, for example, many Bantu languages distinguish tenses/aspects by tone alone, and relative clauses are sometimes rendered by tone alone. Akan of Ghana expresses genitive constructions by tone alone. These lexical functions of tone should be recognized as important characteristics of African tone languages.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	4,200,000	1,260,000	5,460,000
2009 年度	3,700,000	1,110,000	4,810,000
2010 年度	3,700,000	1,110,000	4,810,000
2011 年度	4,300,000	1,290,000	5,590,000
年度	0	0	0
総計	15,900,000	4,770,000	20,670,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：アフリカ諸語・声調・文法

1. 研究開始当初の背景

アフリカには声調言語が多く話されている。しかし、その実態は、十分知られているとは言い難い。通常、声調言語（tone language）という場合、中国語やベトナム語、タイ語などの東アジアの大陸部の言語をイメージすることが多い。しかしながら、これ

らの言語とアフリカの声調言語とでは、幾つかの大きな違いがある。とりわけアジア諸語では、声調の機能として単語を区別する語彙的機能が際立っているが、アフリカでは語彙的機能は一般に低い。しかしアフリカの言語では、声調の文法的機能が低い。この声調の文法的機能は、アジア諸語にはほとんど見ら

れない。

2. 研究の目的

アフリカ諸語における声調の機能を総合的に検証する。これは単に今まで東アジア諸語についてよく言われてきた語彙機能のみならず、様々な統語構造と声調との係りについて詳しく調べる。それにより声調の文法的機能をアフリカ諸語において明らかにし、ひいては声調の十全な理解を提供することを目的とする。

3. 研究の方法

既に調査を行っている言語については手元にあるデータをもとに研究を進めるが、アフリカ諸語についてはデータが不十分なことが多く、基本的には現地フィールドワークによりデータを集める。研究代表者の梶は主としてウガンダのトーロ語とニョロ語について、連携研究者の米田はタンザニアのマテンゴ語とナミビアのヘレロ語、古閑はガーナのアカン語、品川はタンザニアのチャガ諸語、研究協力者の塩田はナイジェリアのブラ語、神谷は南アのバツァ語、そして若狭はエチオピアのウォライタ語とカンバダ語についてである。

4. 研究成果

研究代表者の梶は、ウガンダのトーロ語とニョロ語の現地調査を行い、全体的記述を行いながら、声調の文法的機能の研究を行った。トーロ語とニョロ語は系統が近く文法構造が似ているにも拘わらず、トーロ語が声調の語彙的機能は失っているのに対してニョロ語は単語末の音節がHのものと次末音節がHのもの2種類の声調パターンを持っていることが確認できた。トーロ語は声調の語彙的機能を失ったとは言え、文法的機能は保持し、例えば「私の頭」のように名詞句であるか、あるいは「頭は私のである」という文であるかは、声調の違いのみで表現されることを明らかにした。

連携研究者の米田は、ナミビアで話されているヘレロ語の声調パターンについて調査・研究した。名詞は共起する動詞の活用形や現れる位置によって異なる声調型で実現されるが、それを決定しているのは接頭辞部分の声調であること、また、実現の際には①接頭辞部分のHは右隣の音節に拡張する、②接頭辞部分（動詞の場合は前主語接辞）からHが3つ以上連続した場合は2つめ以降が中声調で現れる、③Lよりも右にあるHは中声調で現れる、という3つの規則が適用されることを明らかにした。動詞については、動詞の種類別に各活用形の声調型とそこに適用される規則を明らかにし、論文にまとめた。また声調型の実現の際に聞かれる中声調に

ついて、先行研究ではこれをダウンステップであると説明しているが、この解釈の矛盾点・問題点を指摘し、中声調についても上記の②③の規則で説明できることを示した。

連携研究者の古閑は、ガーナセントラル州で現地調査を行い、アカン語ファンテ方言の基礎語彙約 3000 および動詞の活用形、所有名詞句のデータを収集した。これをこれまで収集してきたアサンテ方言のデータと比較し、主に名詞の声調分析を行った。その結果、アカン語だけのデータを見ると、声調負担単位は音節であるが、ファンテ方言では、CVCに2つの声調素があてがわれる場合と、1つの声調素があてがわれる場合とがあり、さらにCVCVが声調において1つの単位としてふるまうこともあることから、歴史的にCV由来のCやCVC由来のCVCVをそうでないCやCVCVと区別する必要があることが判明した。

連携研究者の品川は、タンザニアのキリマンジャロ・バンツ（チャガ）諸語のうち、ルワ語やシハ語といった西キリマンジャロ諸語の声調について分析を行った。とくに、西キリマンジャロ諸語にのみ確認される動詞屈折接尾辞 -aa（バンツ祖語**-ag-a*に由来する）の声調パターンについて検討し、次のような結論を得た。1) 音調パターンのみが異なる形態素 -aa (HL) と -aa (MM)があり、前者は未来時制、後者は習慣相を表わす。2) これらは、両者ともバンツ祖語 **-ag-*の継承形であると考えられる。3) **-ag-*は、そもそもその表示概念がはっきり理解されていないが、チャガ祖語段階では、部分相(imperfective) 一般ないし（現在のキボシヨ語がそうであるような）進行相的な概念を表わしていたと想定される。この部分相的な*-ag-*が、他の要素の文法化をきっかけにその標示概念を未来時制に移行した。4) 後者は、**-ag-a*に、状態性述語の過去時制をマークするコピー母音-Vが後続したもの(**-ag-a-V*)に由来すると考えられる。このことは、直後のTBUがHで実現するという音調上の証拠によっても支持される。

研究協力者の塩田は、ナイジェリアのチャド諸語の完了・未完の二元対立はブラ語にも非継続・継続という形で存在し、継続を意味する動詞構造には浮動高声調による形態素が存在することを明らかにした。ブラ語は西チャド、東チャド諸語で盛んな動詞の屈折変化を全く持たず、専ら膠着的手法と語順によって定形動詞の活用を行うが、浮動高声調の使用もその類型論的傾向を反映したものと言うことができる。浮動高声調の機能は継続アスペクトにのみ限定され、他のチャド諸語に比べ整理された体系と言える。他のチャド諸語のやや混沌とした体系を見ると、これは言語の本来の特徴を残しているというよ

り、比較的浅い時代に文法カテゴリーが整理されたと見るべきだと思われる。

研究協力者の神谷は、南アフリカ共和国のクワズールー／ナタール州ウムジムクルで話されているバツァ語について継続的に研究を行い、とりわけ語彙集編纂のため記述調査を継続するとともに音声データの収集を行った。また動詞構造について、さらに多くの用例を収集した。名詞・動詞の声調型について、さらに厳密な同定を行うためのデータを得た。調査の成果は、ウェブ上で公表されているバツァ語語彙集 (The Bhaca Vocabulary) に部分的に追加・反映されており、今後も編集を継続していく。なお、技術上の問題がクリアできれば、各語彙項目について音声ファイルをリンクする計画である。

研究協力者の若狭はエチオピア、オモ系のウォライタ語の声調と統語構造の関係について調査を行った。また歌謡や謎々を収集しそのリズム、押韻の研究を行った。さらにクシ系ではあるが近隣のカンバダ語について基礎的記述研究を進め、今後の文法と声調との係わりの研究の基礎を得た。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 22 件)

- ① Kaji, Shigeki 2013 “Monolingualism via Multilingualism: A Case Study of Language Use in the West Ugandan Town of Hoima”, *African Study Monographs* 34(1), 1-25. 査読有
- ② 梶茂樹 2012「アフリカ人のコミュニケーション—音・人・ビジュアル—」『言語研究』142, 1-28. 査読有
- ③ 梶茂樹 2012「多言語使用による一言語状態—ウガンダ、ホイマ市における社会言語学的アンケート調査から—」, 『多言語主義再考—多言語状況の比較研究』(砂野幸稔), 595-633, 三元社.
- ④ 梶茂樹 2012「ニョロ語の挨拶表現」『アジア・アフリカの言語と言語学』7, 81-120. 査読有
- ⑤ Yoneda, Nobuko 2011 “Word order in Matengo (N13): Topicality and informational roles,” *Lingua* 121-5, 754-771. 査読有
- ⑥ 若狭基道・米田信子・塩田勝彦・小森淳子・亀井伸孝 2011「アフリカの言語」, 『アフリカ研究』No.78, 43-60.
- ⑦ 米田信子 2011「ヘレロ語における動詞の声調 (バントゥ系, R31)」, 『スワヒリ&アフリカ研究』22, 109-131. 査読有
- ⑧ Kaji, Shigeki 2010 “A Comparative Study of Tone of West Ugandan Bantu Languages, with Particular Focus on the Tone Loss in Tooro”, *Zaspil* 53, 99-107. 査読有
- ⑨ 梶茂樹 2010「未知の言語の調査法 —アフリカの言語の場合」, 『日本語学』Vol.29-12, 58-66.
- ⑩ Yoneda, Nobuko 2010 “Topical Hierarchy and Grammatical Agreement in Matengo (N13).” *Bantu Languages: Analysis, Description and Theory*. Legère, Karsten (ed.), Köln. 査読有
- ⑪ Yoneda, Nobuko 2010 “Swahilization of Ethnic Languages in Tanzania: The Case of Matengo”, *African Study Monographs* 31(3), 139-148. 査読有
- ⑫ 米田信子 2010「ヘレロ語における適用形構文と目的語の対称性」, 『アジア・アフリカの言語と言語学』4, 5-37. 査読有
- ⑬ 品川大輔 2010「キリマンジャロ・バンツァー諸語における TA 標示形式とその変化についての覚書」, 『香川大学経済学論叢』第 83 巻, 第 1・2 号, 21-56.
- ⑭ 若狭基道 2010「ウォライタポップス (エチオピア) に見られる記憶」, 『民族紛争の背景に関する地政学的研究』Vol.12, 179-186.
- ⑮ 神谷俊郎 2010 “The Language Situation in South Africa and the Sociolinguistic Status of Zulu — Is Revival of the Indigenous Languages Possible? ”, 『民族紛争の背景に関する地政学的研究』, 14-34. 査読有
- ⑯ Kaji, Shigeki 2009 "Tone and syntax in Rutooro, a toneless Bantu language of Western Uganda", *Language Sciences* Vol.31(2-3), 239-247. 査読有
- ⑰ 梶茂樹 2009「トーロ語における他動詞の自動詞的用法」, 『スワヒリ&アフリカ研究』第 20 号, 165-179, 大阪外国語大学地域文化学科スワヒリ語・アフリカ地域文化研究室.
- ⑱ Yoneda, Nobuko 2009 “Information Structure and Sentence Formation in Matengo”, *Current Issues in Unity and Diversity of Languages* (Collection of the paper selected from CIL18), 443-453.
- ⑲ 米田信子 2009「マテンゴ語の動詞活用形と焦点」, 『スワヒリ&アフリカ研究』20, 148-164. 査読有
- ⑳ 古閑恭子 2009「アカン語の名詞の声調」『言語研究』135, 151-165. 査読有
- ㉑ Shinagawa, Daisuke 2009 “Rare story of the emergence of the Future? : A hypothesis on the historical development of Proto-Bantu *-ag in Rwa (Bantu, E61)”, *HERSETEC: Journal of Hermeneutic Study and Education of Textual Configuration*, Graduate School of Letters, Nagoya

- University, Vol. 2, 137-150. 査読有
- ② 塩田勝彦 2009「日本語・ヨルバ語語彙集」『民族紛争の背景に関する地政学的研究』8, 226-350. 査読有.

[学会発表] (計 21 件)

- ① Kaji, Shigeki 2012 “Monolingualism by Multilingualism: A Case Study of Language Use in a West Ugandan Town, Hoima”, 7th World Congress of African Linguistics, ブエア大学, カメルーン.
- ② Shinagawa, Daisuke 2012 “she-/nde- as modality prefixes in Chaga”, Aflang (アフリカ言語研究会) annual meeting.
- ③ Shinagawa, Daisuke 2011 “Current Sociolinguistic Status of Swahili in Urban Kenya”, Aflang (アフリカ言語研究会) annual meeting.
- ④ 米田信子 2010「スワヒリ語における「外の関係」の関係節」, 日本言語学会第 141 回大会, 東北大学.
- ⑤ Yoneda, Nobuko 2010 “Relative Clauses in Swahili - Contrastive study with Japanese -”, 40th Colloquium on African Languages and Linguistics, ライデン大学, ラインデン, オランダ.
- ⑥ 米田信子 2010「ヘレロ語の声調体系(バントゥ諸語, R31) —名詞と動詞の声調型を中心に—」, 関西言語学会第 35 回大会, 京都外国語大学, 招聘発表.
- ⑦ Yoneda, Nobuko 2010 “Swahilization” of Ethnic Languages in Tanzania: The case of Matengo,” 1st International Conference on Heritage/Community Languages, カリフォルニア大学ロサンジェルス校, ロサンジェルス, USA.
- ⑧ Kaji, Shigeki 2009 “Tone Loss in Tooro, a West Ugandan Bantu Language”, 6th World Conference on African Languages, ドイツ, ケルン大学.
- ⑨ Yoneda, Nobuko 2009 “Tone patterns of Herero Nominals,” International Workshop: Academy UK-Africa Partnership: Languages and Linguistic Studies of Southern African Languages, ボツワナ大学, ハボロネ, ボツワナ, 招待講演.
- ⑩ Yoneda, Nobuko 2009 “Object a/symmetry and animacy hierarchy in Herero. (Bantu, R31)”, World Congress of African Linguistics 6, ケルン大学, ドイツ.
- ⑪ 米田信子 2009「マテンゴ語におけるフォーカス標示と解釈の不一致」, 関西言語学会第 34 回大会, 神戸松蔭女子学院大学.
- ⑫ Yoneda, Nobuko 2009 “The conjoint/disjoint verb form and focus in Matengo”,

The 3rd International Conference on Bantu Languages, 王立中央アフリカ博物館, テルビューレン, ベルギー.

- ⑬ 米田信子 2009「ヘレロ語名詞の声調: 声調パターンと現れ方 (Bantu, R31)」, 第 4 回熱海音韻論フェスタ, KKR ホテル熱海, 招待発表.
- ⑭ 品川大輔 2009「キリマンジャロ・バンツー諸語における TA マーカーの分布と対応—今後の(横断的)調査に向けて—」, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究プロジェクト「言語接触と系統継承: 大湖地域から南部アフリカにかけて話されているバンツー諸語と隣接言語の記述研究」第 2 回研究会.
- ⑮ 品川大輔 2009「ルツ語 (Bantu, E61) における *-ag の対応形と TA 体系内の位置づけ」, 名古屋言語研究会第 66 回例会.
- ⑯ Shinagawa, Daisuke 2009, “Historical split of *-ag in Rwa (E61)”, 3rd International Conference on Bantu Languages, テルビューレン, ベルギー.
- ⑰ 品川大輔 2009「ケニアの多言語状況: 「スワヒリ語」をめぐる言語政策, 言語教育, 言語使用」, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究プロジェクト「多言語状況の比較研究」第 3 回研究会.
- ⑱ 若狭基道 2009「ウォライタ語の関係節」日本ナイル・エチオピア学会第 18 回学術大会, 総合地球環境学研究所.
- ⑲ Yoneda, Nobuko 2008 “Information Structure and Sentence Formation in Matengo,” The 18th International Congress of Linguists, 高麗大学, ソウル, 韓国.
- ⑳ 米田信子 2008「アフリカ諸語による教育と言語権—母語教育のゆくえをのぞむ—」, 日本文化人類学会第 42 回研究大会, 京都大学.
- ㉑ 品川大輔・米田信子 2008「バントゥ諸語における適用形動詞の類型と目的語対称性」, 日本言語学会第 137 回大会, 金沢大学.

[図書] (計 9 件)

- ① 今井由美子・米田信子・平岩葉子・ポール エバンス, 2012 *Sounds Great Listening Practice on English Reduced Forms*, 英宝社, 59p.
- ② 塩田勝彦 (編) 2012『アフリカ諸語文法要覧』, 溪水社, 301p.
- ③ 砂野幸稔 (編) 2012『多言語主義再考』, 三元社, 755p.
- ④ 塩田勝彦 2011『ヨルバ語入門』, 大阪大学出版会, 158p.
- ⑤ 若狭基道・Gebeyehu Ayele Tessema 2011

『アムハラ語入門』（平成 23 年度言語研修アムハラ語研修テキスト 1, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 212p.

- ⑥ 若狭基道（編）2011 『アムハラ語研修テキスト語彙集』、平成 23 年度言語研修アムハラ語研修テキスト 2, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 66p.
- ⑦ 塩田勝彦 2010 『ハウサ語基礎文法』, 大阪大学出版会, 214p.
- ⑧ 梶茂樹・砂野幸稔（共編著）2009 『アフリカのことばと社会-多言語状況を生きるということ』, 三元社, 558p.
- ⑨ 梶茂樹・中島由美・林徹（共編）2009 『事典世界のことば 141』, 大修館書店, 584p.

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等：なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

梶 茂樹 (KAJI SHIGEKI)
京都大学・大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・教授
研究者番号：10134751

(2) 連携研究者

米田信子 (YONEDA NOBUKO)
大阪大学・大学院言語文化研究科・教授
研究者番号：90352955
古閑恭子 (KOGA KYOKO)
高知大学・教育研究部人文社会科学系・准教授
研究者番号：90307473

品川大輔 (SHINAGAWA DAISUKE)
香川大学・経済学部・准教授
研究者番号：80513712

(3) 研究者協力者

塩田勝彦 (SHIOTA KATSUHIKO)
大阪大学・大学院言語文化研究科・非常勤講師
神谷俊郎 (KAMIYA TOSHIRO)
大阪大学・大学院言語文化研究科・非常勤講師
若狭基道 (WAKASA MOTOMICHI)
明星大学・人文学部・非常勤講師